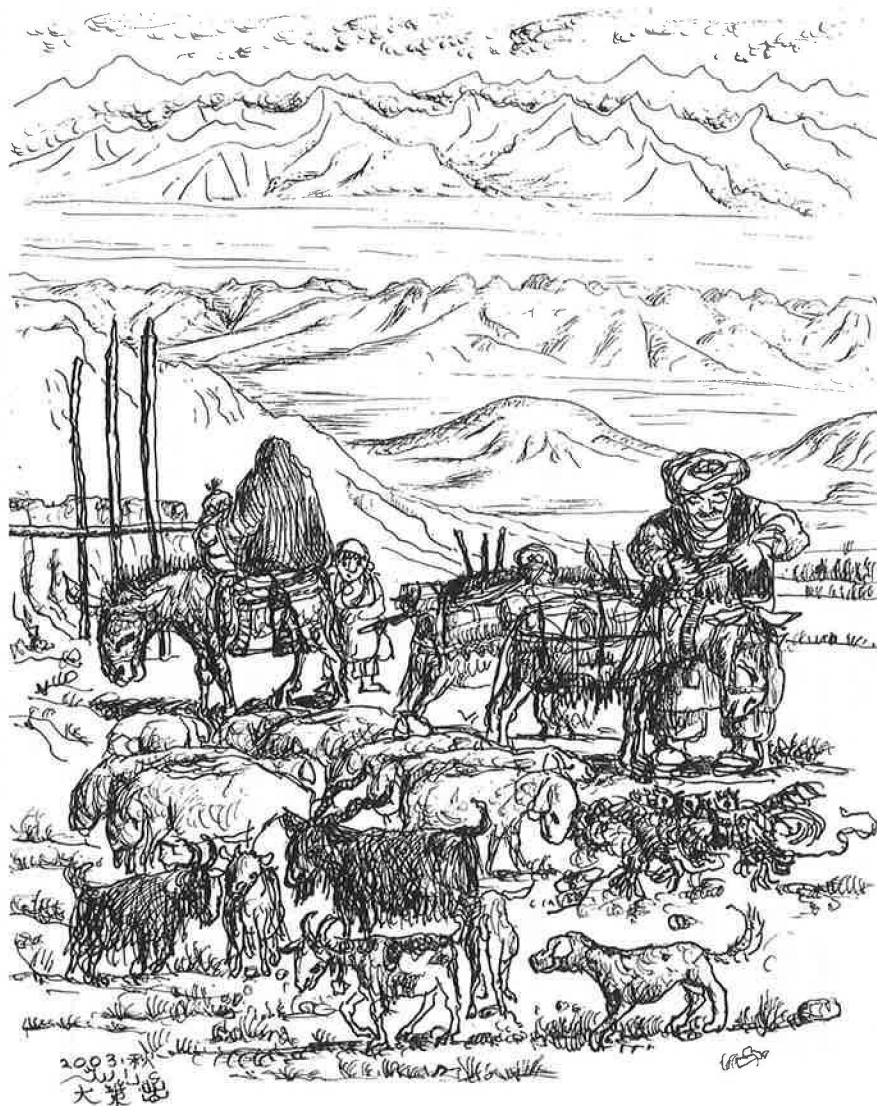


# ペシャワール会報

No.77



表紙絵 羊飼いらスルの引っ越し 甲斐大策

ベシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区  
 大名一丁目10-25 上村第一ビル三〇七号  
 電話 〇九二(七三二)一三三七  
 FAX 〇九二(七三二)一三三七

平和を耕すPMS	中村 哲
患者との意思疎通に苦勞と喜びを感じています	仲地省吾
蛇籠は完成、次は聖牛です	鈴木 学
現地スタッフとともに受付、カルテの改善	鈴木祐治
わが「現実」はアフガンの農場にあり	橋本康範
人材も作物も、大切に育て続けましょう	高橋 修
アフガニスタンで教わった「挨拶」の意味	紺野道寛
「12年の原動力? 現地の手ごたえ、かな」——藤田千代子看護師に聞く	
時空を超えてもどる旅人 甲斐大策著『聖愚者の物語』を読む	樋口伸子

ベシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

# 平和を耕すPMS

灌漑水路は年内六キロ完了、「沖縄平和診療所」開所

オキナフ・ピース・クリニック

PMS (ベシャワール会医療サービス) 総院長

中村哲

九月二十九日に一時帰国しました。八月下旬に北海道からマニラ、福岡、ベシャワール、ジャララバード、ダラエ・ヌール、再びベシャワール、カラチ、さらに引き返して、ジャララバードへ戻り、ダラエ・ヌール、ダラエ・ピーチ、ワマの各診療所を回り、水路や灌漑井戸、飲料井戸の計画を再編成して来ました。まる一ヶ月、(マニラを除き)一ヶ所に二泊以上しないというすさまじい強行日程で、さすがにダウンしました。

しかし、いくつも嬉しいことがありました。現地の「緑の大地」計画は、多少見直しが必要なものもありますが、全体に成果はすばらしく、予想を超えるものがありました。

## 二千ヘクタール超を潤す用水路

規模として大きなものは、やはり用水路ですが、これは砂漠化した耕地が意外に広大で、これに合わせて川幅を思い切り大きくとり、二千ヘクタール以上灌漑を目指すようにしました。最も難所である最初の六キロメートル区間はほぼ年内に掘削完了の見通しです。取水口の工事は、最も水位の

下がる十二月を目指して、全力を挙げて準備されています。伝統工法を大幅に取り入れているため、用水路の基本要素は、石と土と植林です。柳の木が水路保護の主役となるので、とりあえず約五千本の柳、その外側には同数の桑の木を植えます。数年後にはおそらく見事なグリーン・ベルトが、砂漠の中を延々十数キロ続くことを思うと、愉快でもあります。取水口には、大量の蛇籠(じょうろう)千五百個が使われますが、これも既に生産を完了していました。

## 沖縄平和診療所、十月より診療開始

診療の方では、ダラエ・ピーチの「沖縄・ピースクリニック」が最大の懸案でしたが、同診療所のあるクナール州では米軍への襲撃が最も活発なところ。国連や外国NGOが「危険地帯」に指定して寄りつかぬため、とりあえず日本人は小生単独で赴き、九月二十二日に開所式を地元長老会と共に行いました。十月一日をもって移転、診療が開始されます。

また、これも大きな動きですが、縮小気味であ



沖縄平和診療所の開所式で地元長老とともに祈りを捧げる中村医師

ったハンセン病診療を強化致します。最近、医師や看護師、検査技師が高給を求めて大量にカーブルへ移転、医療スタッフが半減しました。その上、一般内科診療に比重が移りすぎ、障害を抱える患者のケアが薄くなっています。加えて、パキスタン政府の「難民完全閉め出し」が徹底してきてプロジェクトへの注文が厳しく、アフガン人職員が働きにくくなってきています。また近頃、診療よりも現体制維持の膨大な事務仕事に忙殺され、本末転倒になる兆しがあります。何事も程度というものがあります。今後の事態を見据え、組織維持の努力はそこそこにして、密なケアを障害患者に集中、いざとなれば基地病院の閉鎖・移転も辞さ

ずとの強力な覚悟で臨みたいと考えています。  
この一弾として、新任の外科医・柴田医師を訓練のためカラチのセンターに送りました。

### トルハム国境井戸、予想上回るニーズ

飲料水源は、着実に拡大、既に作業地は今年六月に千ヶ所を超えて、さらに増えています。八月に始められたダラエ・ヌールの新たな灌漑井戸四ヶ所は、うち二ヶ所で水を出し、麦の作付けに間に合いそうです。これで、既存井戸を合わせ、砂漠化したブディアライ村の七割、九千名以上が生活可能になります。一方、国境の町トルハムでは、二基のボーリング井戸が思わぬ重要性をあらわし、一日六時間給水で全バザールの需要を満たしていました。完全な住民自治管理で、国境問題も絡んで、歴史的に画期的なことであつたようです。通過する度に、住民たちが嬉しそうに挨拶します。少しずつ、造園や植林も進んでいて、三年前の渇水地獄が嘘のようです。最近では、水をパキスタン側に持つてゆく者もいるそうです。

### 援助騒ぎは屁のようなもの

しかし、何といつても今回の最大の希望は、農業関係でしょう。これは他でもなく、サツマイモの意外な成功です。見事な大きさだけでなく、土地の人々の嗜好に非常に合っていることが確認されたのです。担当の橋本くんからの報告を待ちたいと思いますが、昨年のサイレージによる飼料改善Ⅱ搾乳量の著しい増加に次ぐクリーンヒットです。いや、場合によっては満塁ホームランになる

可能性があります。以前ベシャワールで試したことがありましたが、いずれも貧弱で、実はさほど期待されてなかつた作物でした。やり方に問題があつて、高橋Ⅱ橋本コンビが日本式の畝で過剰灌水・過剰肥料を避けて適切な方法で行つたからです。やはり、専門家です。サツマイモはツルで簡単に増やせ、しかも水が少なくて済みますから、この大干ばつのさなか、広まれば大変な貢献になるはずで

一昨年、拙著『医者井戸を掘る』が話題になつたことがあります。橋本君いわく、「さらに『医者川を掘る』を綴つた後、『医者芋を掘る』の三部作にはどうか。緑の木陰の水路沿いで、焼きいも屋を開いてはどうか」と提案。小生答えていわく、「その際は、君に『青木昆陽之介・芋の守・橋本康範』の号を与える。用水路完成のあかつきはイモ数百石の禄高に封ずる。『医者芋を掘る』の大団円は、芋を食つて腹の張つた我等がおならを落としてスカツとする。即ち、全ての援助騒ぎは屁のようなものであつたということを悟つて、終わるのだ」。

かくて、ワーカーの間で楽しい話がはずみました。

\* \* \*

アフガンの情勢は、日に日に緊迫しているように見えます。来年六月の総選挙は今のところ、東部アフガンで見る限り机上の空論で、米兵への攻撃が次第に増加、相当数の外国軍の投入が計画されています。最近の趨勢は、復興支援に携わる多くの外国団体が、積極的に外国軍隊の地方展開を

主張していることです。これは地元には奇妙に映ります。外国軍に守られてやる復興がいつたいあり得るのかと思います。政治・軍事上の動きを見る限り、出口がないと言えるでしょう。しかし、暗い政治の動きとは無縁に、生きるのに必死、かつ共に汗を流すことによつて、人を安堵させる平和な世界があります。

巖流島の決闘で、佐々木小次郎に対し、宮本武蔵は「汝、白刃をとつて其の妙を尽くせ。吾は木戟を携えてその秘を顕わさん」と述べたという有名な話があります。武蔵ほど偉くはありませんが、「汝、金と武力を駆使して勝手にやれ。対する吾らは、鋤と鍬、水と植樹でその偉大な恵みを顕わそう」と述べたい心境であります。今後とも、ご支援を心からお願ひ申し上げます。

### 中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ベシャワールに赴任。以来十九年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをベシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行つている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲つた大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、今春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約一五万人。

## \*ワーカー通信

患者との意思疎通に

苦勞と喜びを感じています

PMS医師

仲地省吾

## アフガン医師の相次ぐ退職

我がPMSの職員は大半がアフガニスタン人です。彼らのほとんどが、この二十年くらいの間の戦争時代に家族と共にパキスタンに逃れて来た難民です。タリバンが崩壊した後、たくさんのアフガニスタン人の職員が辞職し、アフガニスタンに帰って行きました。戦争で故郷を逃れて来て、いつかは帰りたいと思うのは、十分すぎるほど理解できます。その影響で、今PMS病院は特に医療従事者がどの部門も不足気味で、すこしピンチに陥っています。

昨年(二〇〇二年)の初めに、私がPMSに赴任した当時、現地医師が二十数名在籍していて、日本でなら小規模の病院に相当するPMSにこんなにたくさんいることに驚いたくらいです。当時PMSはカーブル市内にも五つのクリニックを持ち、アフガン東部の三つのクリニック、

パキスタンの二つのクリニックを合わせると何とPMS病院以外に十ヶ所のクリニックを運営していたので、クリニックに派遣する医師の数を考えると、二十人以上の医師が在籍していても不思議ではなかったのです。しかし、私が赴任して以来、十数人の医師が辞職しアフガニスタンに帰って行きました。新たに採用したりもしていますが、日によっては、ほんの三人程の医師が外来に座っていることも希ではなくなっています。

中村医師の方針の一つ「誰も行かないところに行く」のもと、世界のNGOが殺到しているカーブルで、PMSのクリニックを閉鎖撤退したこともあって、PMSの負担が少なくなり、数少ない医師数でも何とかやっているとというのが現状です。我々の活動方針とは相反して、ペシャワールにあったアフガン難民のための外国のNGO医療機関もカーブルに次々と移動しているのです、逆にペシャワールに残っている難民にとっては困った状況になっていると思います。PMS以外に二つあった日系の医療機関もカーブルに移動しました。その影響か、明らかに外来に来る患者数は増加しています(後で説明しますが、当院をわざわざ訪れても受診できるとは限りません)。

## 診察数制限の苦悩

PMS病院では一日約三百人の外来患者さんを診察します(外来診療は午前中だけ)。曜日によっては減ることもありますが、これ以上増えるこ



ラシュト診療所で診察中の仲地医師

とはありません。たとえ五百人、六百人の患者さんが門に押し寄せても、診察できるのは、大変酷いようですが、三百人くらいなのです。普通日本では(もちろんパキスタンでも)病院は患者さんを診ることによって収益をあげることができ、患者さんが増えることはいいことであって、利益が出るし、病院も発展拡張させられます。ところが、PMSのようなNGOの医療機関だと、収入は日本の一般の皆様の寄付金だけで、逆に患者さんをたくさん診ることは支出が増えることになり、一年間の予算は決まっています、診れる外来



掘削が進む用水路

患者さんの数も自ずから決まってきました。無制限に患者さんを診ていたら、あつという間にお金は無くなっていくでしょう。

ペシャワールにある他のNGOの病院も同様に患者数を制限するシステムを取っているようです。もちろんこれは私たちのPMS以外にもたたくさんの医療機関が存在する大都会のペシャワールだからできるのであって、遠隔地域にある私たちのクリニックではすべての来院患者さんを診察しています。

患者さんの受付をしている病院の門では、一定の数に達すると、診察券の配布を停止します。後は重症（救急）患者さんだけを受け付けるということになっています。しかし、誰が救急であるのか、ないのか判断するのは大変難しいこととはず

想像できます。しかも受付をする職員は医療従事者ではありません。

PMS病院はちょっと不便なところにあります。以前の会報でも書いたように多くの患者さんはバスやタンガ（馬車）を乗り継いで片道一〜三時間くらいかけて私たちの病院にやって来ます。必死の思いでやって来たのに、診察を受けられずに帰っていく患者さんのことを思うと胸が痛みます。診察券をもらえなかった一部の患者さんは、門をすり抜けて診察室に侵入し、私の様な日本人医師を見つけると必死に訴えてきます。「こんなにひどい症状があつて、こんなに遠いところからやって来ているのに、なぜ診てくれないのか」と。しかし、私にしてもこの人に診察券を与えて良いかどうか判断するのは大変難しいのです。門の外には診察を拒否されて素直に帰っていく人や、まだ待っている患者さんが大勢いるのです。その人達を全員観察して重症度のひどい人たちから順番に診察券を与えれば、問題ないのかもしれませんが、そんなことをするのは不可能ですし、門をすり抜けて侵入してきた人だけに診察券を与えるのも公平さを欠きます。こういうことは日本では全く経験のなかったことです。NGOとして医療をやっていく難しさを改めて感じさせられました。

### 直情で深いパシトゥン人患者

患者さんが救急であるかどうか判断するのは難しいと書きましたが、実はPMSの外來で診る患者さんは全員急性疾患です。「特別外來」で診るハンセン病などの患者さんは別にして、いわゆる

慢性疾患で定期通院しているという患者さんはいません。

PMSの外來で投薬できる薬は、四十数種類に限定されており、これには高血圧や糖尿病などの慢性疾患の薬は含まれておらず、すべて急性疾患に対応するものだけです。もちろん診察の結果慢性疾患を合併していることはしばしばです。しかし、当院でその薬は処方できないので、患者さんにはバザールの薬局で買ってもらいます。結局、単に診察を受けるだけのために当院にわざわざ定期通院する人はいなくなります。またもし慢性疾患の患者さんにも薬を配布すれば、あつという間に外來患者数はとんでもない数になり収拾がつかなくなり予算もないので、不可能です。日本の一般病院で外來患者三百人といっても普通その内二百人以上は定期通院の落ち着いた患者さんですから、PMSの外來の激しさが想像できると思います。

医師の仕事はやはり患者さんと会話して初めて成り立つものです。私は赴任した当初は通訳を置いて外來をしていました。通訳といっても現地語のパシトゥン語を日本語ではなく英語に通訳してくれるだけですから、私にとつてはかなりまだるっこく感じるようになりました。医師としての喜びもあまり感じられませんでした。

もちろん一年以上経つても私にとつてはパシトゥン語を理解するのは大変困難ですが、医療関係の用語だけはなんとか覚えて、数ヶ月前から通訳無しで自力で外來診療を試みています。当初は私の前に座った患者さんも、全く意思の疎通が取



れないとみると、すぐに他の現地医師の席にさつと移っていたのに、最近ではお互いの会話は不充分でもほとんどの患者さんは最後まで私の前に留まっています。時には今診ている患者さんの後ろで次の患者さんが列を作って待っていることがあります。私の診察は現地医師に比べるとはるかに時間がかかるので、私も気になるので、看護師に他のドクターの席に行くように言ってくれと頼んでも動くことせず、どうも私に診てもらいたいと言っているのです。ちよつと恥ずかしいような嬉しいような気持ちになります。また次に待っている患者さんが、私のへんてこりんなパシエトウ語を理解して、今診ている患者さんと同じパシエトウ語で通訳(?)してくれることも少しはばです。

患者さんの大部分は子供を連れた女性達です。外に出る機会があまりないイスラム社会の女性達なのでおとなしい人たちであろうと、一般には想像するでしょうけど、いやいや、とても激しいです。外来での訴えの激しさは日本人の比ではありません。貧乏だから何とか助けてくれと哀願されたり、こちらの治療方針に納得しなくて、いろいろわめいても私が「この薬を飲みなさい。これで終わり」と言うと、あんなに激しく言っていたのに、あっさり何事もなかったかのように、すぐに引き下がります。実にさわやかです。ああ、日本と違うなと思ってしまうところです。でも、このパシエトウ人達の「激しさ、あっさり」スタイルがだんだん心地良くなってきているこの頃です。

## 蛇籠は完成、次は聖牛です

駐タラエ・ヌール、水路計画担当 鈴木 学

### 士気上がる水路チーム

現在、全長十六キロある第一期水路計画工程のうち約半分の前半エリアで作業を行っており、約三ヶ月半で二・五キロの掘削がほぼ完了している。ただ、これから取水口付近や、最大掘削約八メートルの岩山、大量の埋め立てが必要な区間、水道橋、岩盤を破壊しながら水路を造っていく場所など、難所が待ち受けており、いよいよ水位が下がる冬場に向けて水路事業は本番を迎えようとしている。

客観的に見て我々PMSのエンジニアの質は非常に高く、夏の焦げるような暑さ、ある時期決まって毎日やってきた砂嵐とその後の豪雨も乗り越え、毎朝日の出が遅くなるのを感じられる今日この頃、カナル(水路)チームの士気はさらに充実している。

水路事業の専属日本人スタッフは二名。日曜から木曜の朝五時から夜遅くまで、車での移動と食事の時間以外はエンジニアとともにカナルの仕事

に携わる。清宮さんの主な仕事は日々のレイバー(作業員。約五百五十名/日)のサラリーを確実に払うこととお金の管理、および水路の進行状況を把握すること、自分は水路の取水口部分に大量に必要な蛇籠と聖牛の作成を担当している。蛇籠は、亜鉛メッキしてあるワイヤーを編んで、組み立て、ワイヤーで編まれた丈夫な箱を作り、その中に石を詰める。これが容易に扱える非常に強固な構造物になる。これを強い水の流れが直接ぶつかる箇所(護岸や、水位を上げる目的で川の中に造る堰の材料として使う。聖牛は正三角形の鉄筋コンクリート柱(一辺の長さ約一・五メートル、コンクリート柱の断面約一〇〇平方センチ、重さ約一〇〇キログラム。これを並べて水路の護岸にも用いる)を三つ組み合わせ安定した正三角錐構造にし、蛇籠と組み合わせる取水口付近の防護に用いる。こちらは、強い水流の制御や、流れてくる大石が直接蛇籠堰に当たるのを防ぐためのテトラポットのような役目もある。

蛇籠も聖牛も昔から日本で使われてきたもので、中村先生が提案して作成が開始された。蛇籠はガビヤンという名前前でアフガニスタンでも多く見かける(使い方は日本と多少異なる場合もある)。聖牛は、日本では昔から木を使って造られてきたが、こちらの木はとも高いため鉄筋コンクリートの聖牛にし、コンクリートの型作りから始まり全てオリジナルである。

### 作業員と家族ぐるみの交流

近頃は、蛇籠プロジェクトが目標(蛇籠三千個)

の半分以上のストックを二ヶ月半で達成したこと  
から（レイバー数約四十五人/日、作業日週六日）、  
こちらはサイト・エンジニア（現場監督）に任せ、  
日々のチェックと材料の補充にのみ気を配ってお  
り、毎日聖牛プロジェクトのレイバーと一緒に鉄  
筋コンクリートの聖牛作りに励んでいる。全員  
（八名）が宿舎のすぐ前の村か、歩いて十分くら  
いの場所から来ており、たいがい午後は自分の畑  
を耕している。八名のレイバーのうち兄弟が二組、  
ほぼ全員がなんらかの親戚関係にある。皆、非常  
に人間味があり、毎日彼らと共に作業するのは本  
当に楽しい。彼らと仕事をしていると、こちらの  
人は子供がそのまま大人になったような人が多い  
と感じる。良く喋り、歌う。こちらが真剣に仕事  
をしていると彼らも真剣に仕事をする。文字が書  
けない（読めない）者も多いし、全員英語など話  
せないが、かたことのバシウトウ語と実際にや  
ってみせることで仕事に支障はほとんどない。最  
近は十時半の休憩になると強引に日陰に引っ張っ  
て行かれ、チャイが入られ、自家製の揚げたナ  
ンを皆で食べる。十時を過ぎると小さい子が兄弟  
でぞろぞろ前の村から出てくる。母親にチャイや  
ナンを持たされて男の子も女の子も裸足でこと  
こやってくる。そして、コンクリートを作ってい  
る場所に来て、どこで食べるのか父親たちに聞く。  
全員マクタブ（学校）に行く前の小さい子ばかり  
である。暑い日の午後にはクナル河で洗濯もか  
ねて泳ぐこともある。そう豊かでないにしろここ  
ではひと自然も魅力にあふれている。

自分の関わっている蛇籠・聖牛作成作業だけを

見ても、多くの日本、パキスタン、アフガニスタ  
ンの人々の協力に支えられていることを日々感じ  
ている。蛇籠レイバー用の丈夫な軍手（一ヶ月に  
約百組必要）は日本の事務局から、大量に必要な  
蛇籠用ワイヤーはベシャワールで購入してもらっ  
ているし、ワイヤーを切るカッターは長嶋さんが  
日本からたくさん持ってきてくれたものだ。聖牛  
作成に必要なセメント、鉄筋の購入・輸送はジャ  
ラバード、ドラエヌール両オフィスの協力が必  
須だし、砂利、砂の採取（クナル河の河原から）  
にはダンブやエクスカベーター（掘削機）のアレ  
ンジをエンジニア達との協力のもと行う必要があ  
る。沢山の人たちの支えのもと、今日も一日無事  
に作業を終えられたなと、サイト（作業現場）  
からドラエヌール・オフィスに帰る車の中で赤く  
染まった西の空を見ながら思う。

#### ▼寄附をしていただく皆さまへ▼

\*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り  
下さったご寄附については税金控除の対象となりませ  
ん。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

#### ▼未使用の切手、ハガキを！▼

\*会報の発送費に、年間七百万円以上かかっておりま  
す。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいた  
ければ幸いです。

#### ▼記入は分かりやすく▼

\*ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局  
からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がご  
ざいます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大  
変助かります。

表紙をめぐる小さな物語 38

羊飼いのラスルの引っ越し

甲斐大策

ラスルは、八頭の羊、五頭の山羊、ハ  
羽の鶏、一頭の犬を確め、小さな泥屋前  
の平地に佇む驢馬の背の身重の妻と二歳  
の娘、脇に立つ四歳の息子を振り返り、  
家財の全てを積んだ二頭の驢馬の紐を締  
め直した。

ヒンドウークシ北麓、プリフムリの外  
れにやっと生きてきた。畑を持たないラ  
スルは、ただの羊飼いである。その羊に  
食わせる草もなくなった。動いていくし  
かなかった。

タジクの血を引くから、その血が多く  
住む東北へ向うつもりだった。そうやって、  
個々の土地で同族の血が占める度合いは  
濃くなる。とはいうものの、不安がない  
わけではなかった。手に技術を持たない  
ラスルは、不安一杯だった。

短い秋である。冬が始まっている。珍  
しく低い雲が走る。

自分の名はダウド（ダヴィデ）やムハ  
ムマドを始め多くの預言者や使徒を意味  
する。そのラスル達は誰もがさ迷う羊飼  
いだった、と思えば少しは気持ちが安らぐ  
のだった。

## 現地スタッフとともに

### 受付、カルテの改善

ダラエ・ヌール診療所駐在

鈴木祐治

#### 三つの言語が飛び交う

ダラエ・ヌールに来て、もうすぐ三ヶ月が経とうとしています。現地では、診療所での受付という仕事をさせて頂いています。診療時間は午前八時から午後二時半まで、それ以降は急患のみ診療（急患は二四時間診療）と時間は短いのですが、一日の外来患者数は百二十人から百六十人、多い時には二百人を超えます。診療費は六アフガニ、または十パキスタンルピー（日本円で約二十円）ですが、ハンセン病の患者、癩（か）の患者、身体の不自由な患者さんに関しては、無料で診療を行っています。診療所内のスタッフは、ドクター、ナース、検査技師、薬剤師、受付、各一人ずつ、門番二〜三人で、門番以外は一ヶ月ごとの交代となっています。ダラエ・ヌールでは、パシユトー、パシヤイー、ファルシーと三つの言語が飛び交っており、ドクターですら通訳（門番のモハマッド・ヌールさん）が入らないと診療ができないこともあります。そして、これは日本では考えられないことですが、日毎に男性患者

のみの診療日、女性患者のみの診療日と交互に日取りをして診療を行っています。十歳以下の子供や急患に関しては日取りに関係なく診察しています。

「この人たちは本当に病人なんだろうか!？」

私が来た当初は、診療所内に「受付所」と呼べる場所はなく、入り口付近に木製のベッドを柵代わりに立て掛けて行なっていました。朝八時開院と同時に六十人近くの入連に一瞬にして囲まれ、我先にと言わんばかりに診療券を買って求めにきました。この人達は本当に病人なのかと思う程、皆殺気立っており、お金を投げつけてくる人や、ベッドを押し倒してくる人、中には杖でコツコツ叩いてくるお婆さんまでいるような状態でした。門番が二人いないと落ち着いて配ることもできず、患者さんもスタッフも大量の汗を流しながらのやり取りでした。今では新たな受付所を設けて、以前のような混乱状態は改善されました。

他にも改善の必要のある問題がいくつも見受けられます。まず、癩癩の患者さんについて。私が調べたところ、現在五十四名の患者さんがいるのですが（〇二年一月以降も来院されている患者さんは三十四名）、患者さん個々のカルテという物がなく、一枚の用紙に複数の患者さんの来院日、症状、処方した薬などが記載されており、それが八十枚近く、二つのファイルにバラバラにまとめられていた為、患者さんがいつ来院したのか、どの薬をどれ位処方したのか、どの種類の薬を処方したのかすら明確ではないものが数多く見受けられます。また八月には、七百個前後もの期限切れ

の薬や器具が見つかっており、現地スタッフ皆がこういった状態が良くないと判っていないながら、何年も改善しようとせずに診療を行なってきた現状があり、話を聞けば全て他人のせいになされて終ってしまいます。ですが、これは彼等だけが責められるべきことではないと私は思います。これから、少しずつですが、患者さんの為にはもちろん、スタッフの為にも、彼等自身が継続して管理している体制を現地スタッフと共に考えていく必要があると思います。

#### マラリアの洗礼

日本では、まずお目にかかる事のできないマラリアですが、こちらでは毎日必ず、マラリアの患者さんが来院しています。六月のマラリア患者数は53人（患者数）／336人（検査総数）、リーシユマニア症は4人、七月に入り一気に倍増して、349人／596人、リーシユマニア症は3人、八月は更に増え、425人／948人、リーシユマニア症は1人となっております。

この月は運悪く、私もマラリアに感染してしまいました。高熱、極度の悪寒、頭痛、吐気、下痢、身体の痺れなどの症状が一度に現れ、更には、水をいくら飲んでも汗ひとつでなくなり、熱も四十度近くまで上がってしまいました。さすがにこれは少し危ないなと感じ、チェックして頂いたところ、見事に陽性反応が出てしまいました。多少、苦い思いもしましたが、スタッフ皆が看病の為に何度も部屋まで足を運んでくれ、中には夜中に起きて、様子を見に来てくれる人までいて、皆の思いやりに感謝しています。



## わが「現実」は アフガンの農場にあり

駐ダラエ・ヌール、農業計画担当

橋本康範

### 夢か悪夢か

私は先月「夢の国」日本での休暇を終え現地へ戻ってきた。日本は確かに夢の国だった。スイッチ一つで快適な空間が作り出せる機械、二十四時間まぶしく光りながらありとあらゆるものを売っている店、身体を痛めることなくスムーズに車が走れる道路、変な虫や病気を恐れることなく思い切り食べることが出来る食べ物、如何様にも身体に心地よい暮らしを作り出せる国なのだ。

日本に着いてすぐ、私はペシャワール会の報告会に出席した。すると今度はアフガニスタンの出来事が夢の中の出来事のような気がしてならなくなったのだ。つい何十時間か前の、実際の出来事を話していたのだが……。アフガニスタンの風景や状況が、その時自分が立っていた情景とはあまりにもかけ離れすぎていたのだ。どっちが夢か現実かはつきりとしなのまま、私は驚くほど快適で楽しい日本を満喫した。しかし、日本での一ヶ月の間、あらゆることに違和感を覚えながら過ご

たように思う。そして、夢の国に一ヶ月もいるとなんだか息切れがしてくるのだ。騙されているような気がしてならないのである。表面上はとも住みやすく、過ごしやすく大げさに飾ってはいないが、その実何だか悪夢が蔓延しているような気がしてならないのである。三週間を過ぎる頃には、すごくアフガンが恋しくなった。

### 「ミスター・ハシモト、問題ないよ」

案の定こつちに戻ると何の違和感もなくすぐに自分の身体と心はアフガニスタンに溶け込んだ。改めて今の私の「現実」はここにあるのだと強く感じた。

早速、私はパイロットファーム（試験農場）のあるダラエヌールのカライシャヒ、ブディアライ村へと向かった。日本に帰国する前に私のパートナーであるワリーと今後一ヶ月の予定や各作物に対する作業についてミーティングを持った。そして何より、この一年は毎日顔を合わせ一緒に仕事をしてきたパートナーだから、何か問題が起きたとしても彼は私の考えを推察しながらうまく自分の考えとミックスして対処してくれると信じていた。しかし、どきどきした。そこには、カライシャヒ村のパイロットファームヘソルゴー、アルファルフア、大豆三種類、トウモロコシ、お茶、ブディアライ村のパイロットファームヘソルゴー、アルファルフア、トウモロコシ二種類、甘藷、ブドウが元気に育っていたり、しっかりと実って収穫されたりしていた。確かにいくつかの問題も起きてはいたが……。例えばお茶の原因不明の枯



苦心の末、収穫されたサツマイモ

死が続いていたこと。それに対しては枯死した苗を土から起こし、根や土を調べ、それでも原因ははっきりしなかったのだが、灌水を調節したり、日囲いをつけたりしていた。スイートコーンの発芽不良については昨年パイロットファームで収穫できた適応性の高かった品種を再度播種していた。全ての問題に対して、適当に時間を待ち様子を見よう、というのではなく、何とかして改善しようとして懸念やっていた。しかもその対処の仕方がおそらく私がいたとしても同じようなことを考えただろう、と思われることばかりだったので、それが素直にうれしかった。そして彼らは笑って言った。「ミスターハシモトがいなくてアンハツピーだったが仕事に関しては全く問題ないよ」と。

## 人材も作物も、 大切に育て続けましょう

農業担当・橋本さんへの手紙

農業指導員 高橋 修

七月の下旬、橋本さんが一時帰国されていた時にお目にかかってからもう二ヶ月経ちました。一ヶ月余の休暇中、ご家族の皆さんとの団らんを満喫され、また友人の方々と旧交を温められたことと思います。

八月二十二日に、成田空港から電話をいただき、元氣いっぱい帰任される橋本さんにホッとしました。失礼ですが、里心がついていないかと少し心配していたのです。同時にジーンと胸に伝わるものがありました。お許しただいて率直な感想を述べますと、自分の息子の旅立ちを見送る心境でした。

アフガンに帰任されてから早一ヶ月経ちました。恐らく今頃は、ご家族、友人に対する態度と同様に、現地のスタッフ・農家と一緒にあって、毎日を忙しく過ごしておられることと想像しています。私が初めて橋本さんにお会いしたのは去年の六月、私が二回目に現地を訪問した時でした。昨年三月に開始したペシャワール会の緑の大地計画（農業計画）のパイロットファームで、砂混じりの熱風が吹き付ける中で作付計画を相談し、一緒

に飼料作物を播き、お茶の苗を植付けました。また農家との話し合いにも同席しました。

その後、昨年の九月、今年の三月と三回、現地で橋本さんと一緒に仕事をしてきましたが、お会いする毎に橋本さんの存在感が高まっているのを実感しました。私が「〇〇の準備をしておいたら？」と提案しても、橋本さんは、大半の事柄について「担当農家に任せておいて大丈夫でしょう」「ワリー（現地スタッフ）が知恵を出してくれませう」と、一向に動じる様子がないのです。そのためにこちらは余計にイライラが募るのですが、蓋を開けてみると憎いほど橋本さんの予言が当たり、脱帽させられました。私は気が小さいためにあれこれと先回りして心配する癖があり、橋本さんに無用の気遣いをさせたと思し訳なく思っています。

橋本さんの見通しの確かさは、まず相手を信じることによって、相手を期待に思えなければとの心境にさせていることにあるように感じました。もちろん無原則に相手を信じられていたのではないようにも思っています。例えば、朝仕事にかかると今日の予定を、夕方仕事が終わった時に反省事項を出し合い、同じ目線で現地スタッフ・関係農家と意思統一をされています。また毎月一回、討議方式で綿密に打ち合わせをされていますが、この時の橋本さんは、時には厳しく、時にはじんわりと硬軟織り交ぜ、繰り返して説明されているように見えます。感心するのは後日、打ち合わせした内容の実践状況を畑で静かに観察されていることです。討議と観察を通じて、相手の性格を理解し「信じ方」を工夫されているのでし

よう。

農業計画がスタートしてから一年半経ちました。橋本さんの努力によって農業計画を担ってくれる現地の人材が立派に育ってきました。八月末、橋本さんから帰任直後にいただいた連絡の中で、「留守中ワリーと担当農家が知恵を絞ってフォロワーしていき、全て旨くいっているのに感激……」とのくだりがありましたね。これは人材が育ちつつある何よりの証拠だと、私は橋本さん以上に感激したことをお伝えしておきます。

これは余談ですが、夕方解散前に、誰かが日本語で「今日はおいておしまい!!」と音頭をとって一斉に拍手する習慣が根付き、その辺にいる子供達まで真似をしているのに驚きました。橋本さんは本当に子供好きです。子供達が足下にまともわりついても嫌な顔一つせずに楽しんでおられます。これも農家の信頼感を得ることに役立っていると感じました。私には真似のできないことです。

橋本さんについてもう一つ感心していることがあります。去年、橋本さんは農業が初めてであると同じ、正直言って大丈夫かなと思いましたが、ところがなかなかどうして、私どもから提供した情報を参考にしながら、僅か一年の間に立派に農業担当者として成長されました。橋本さんの指導で、ソルゴー、アルファルファー等飼料作物の素晴らしい生育を見ることができました。また節水栽培、地力増強などの技術も少しずつ定着してきました。その秘密は、橋本さんが自然体で、綿密な作物の観察、試行錯誤、実践結果の評価、改良技術の実践、を繰り返しておられるところにあると感じて

## アフガニスタンで教わった 「挨拶」の意味

ジャララバード事務所駐在  
紺野道寛

ジャララバードに来て、早や2ヶ月半が過ぎました。まだまだ右も左も分かりませんが、アフガン人スタッフ・日本人スタッフに支えられながら日々歩んでいます。正直な所、最近になってようやくPMSの事業が分かってきた気がします。水路や井戸・農業の現場を見て、改めてPMSの活動の幅広さに驚いています。

この2ヶ月半は、買い出し等でバザールに出る機会が多くありました。ペシャワールのバザールとは違い、小じんまりとしています。でも、砂埃と汚臭・喧騒と活気に溢れている所は同じです。外出時は、必ず現地人スタッフに同行して貰います。オフィスの支払い等でいつも行く店があるのですが、その店員(デュガンダール)は、必ずペプシをご馳走してくれます。スタッフに尋ねると、「君が日本人だから。日本人はメルマ(客人)だ。自分一人で来た時は、(ペプシは)出ないよ」との事。このような客人接待を何度も受ける度に、日本との違い・文化の違いに驚きます。

例えばこちらでは、目が合ったら「アッサラム・アレイクム(あなたに平安が訪れますように……という意味)」と挨拶をかわし、肩を抱き合い、握手をします。痺れる程手を握り手をブンブン振る人もいれば、キスをする人・腰に手を回し体を持ち上げクルクル回る人もいます。毎日何十回と繰り返し、誰かに触れる度にその力強さ・温かさから「ああ、生きてるんだ」という当たり前のことが伝わります。

もし日本でこちらの挨拶が流行したら、陰惨な事件、人を人とも思わないような犯罪が減るのではないかと……世界中でこの習慣が定着したら戦争は無くなるのではないかと……などと一人で空想しています。アフガニスタンに来て大切なことを教わった気がします。他にも、日本や日本人が学ぶべきこと、忘れてしまったことが多くありそうです。

いるのですが間違っているでしょうか。

お陰様で、技術的な面でも少しずつ用途が広がりましたが、今日まで本当にたくさんの方の困難と失敗もありご苦労をお掛けしました。こまめにいただく現状報告が私の最大の関心事となつていますが、一項目ごとに咀嚼しながら、あの畑のあの作物がこんなに生長したのかと、橋本さんの成長振りと重ね合わせ一つ一つ目に浮かべて感動しています。また時には、あの畑のあの作物はなぜ発芽が悪いのだろうと心配し、今、私から何をサポートすべきかと悩むこともあります。確かにまだまだ技術的には問題が多いですが、ドラエヌールに新しい農業の息吹が生まれてきていることは確かだと喜んでいきます。

橋本さん、これからも自信を持って、今まで進

めてこられた人材と作物の育成を一体化した活動を継続していこうではありませんか。いろいろご苦労が多いと思いますが、苦労を糧として、

ペシャワール会の活動を通じて、より深みのある人生観を養っていただきたいと切望しています。

終わりに一言だけお願いをしておきます。橋本さんは大変健康です。またドラエ・ヌールはペシャワール会に対する信頼が厚いので安全と伺っています。しかし、日本にいても同じことですが過信は絶対に禁物です。健康と安全を守るために必要と判断される時には義理も体面も捨ててください。橋本さんが大変健康であるが故に余計に心配です。健康と安全を守ることが仕事の一環であると思っ得ていただきたいのです。農業は息の長い仕事です。ペシャワール会の農業計画もまた然りです。

す。途中で挫折するよりも、少し遅れても長続きする方が遥かに重要と考えてください。

手前勝手なことを長々と書きつづつて恐縮です。元気な橋本さんに再会できることを祈りながら筆を置きます。皆さんによりしくお伝えください。

●お詫びと訂正……先々号(75号)及び先号(76号)中、一部記述に誤りがございましたので、ここにお詫びと訂正を致します。

①75号

2頁写真説明

7頁見出し

9頁写真説明

②76号

6頁2段目24行目

6頁3段目11行目

7頁2段目13行目

竣工式↓起工式

竣工式挨拶↓起工式挨拶

目黒さん↓橋本さん

三〇八ヶ所↓三八ヶ所

三・五km↓三・五m

爆破班二一八〇名↓

爆破班二班、一八〇名

## 「十二年の原動力？」 現地の手ごたえ、かな」

藤田千代子看護師に聞く

——三年振りの帰国ですね。まずは大旱魃が始まった頃のことを教えてください。

「二〇〇〇年の夏に、私たちの診療所があるラシユトの近くの山で氷河が崩落してかなり大きな雪崩が起こりました。その時赴任していたドクターは、雪崩が起こった中を徒歩でマストツジまで下りていって、八月の初めの夕方に病院に帰ってきたのです。そして帰国中の中村医師にすぐに連絡しました。雪崩が起こると村人達を取り残されます。今こそ医療が必要だということで、救急医療チームを作って現地へ送るよう指示を受け、私はマストツジまで行き待機し、当時PMSにいた蓮岡さんには現地のドクター、ナース（看護師）と一緒にラシユト診療所まで行ってもらいました。」

調査をした結果まだ危険な状態だったので、診療所にあつた薬の全部を、ラシユト診療所の一つ手前の村の、雪崩のあつた対岸の小さな家を借りて移し、雪崩が発生しない状況だったら、そこから薬を出して診療所に持っていくて診療するといふ体制を整えました。その時はラシユト村出身のヤルマスデインというナースが指揮しました。門

衛には不寝番をしてもらいました。というのも雪崩の前にはすごい音がするらしいので、何かあつたらすぐにスタッフを起こして診療を続行するようににしたのです。アレنجが終わってマストツジからペシャワールに帰る途中に、中村医師に経過報告をしました。先生は「アフガンで井戸掘りを始めるので、蓮岡はペシャワールに帰ったらすぐに自分と一緒にアフガンに行くように」と言われました。それが本格的な井戸掘りの始まりです。」

——水が少なくなっているというのは以前から聞いていたのですか？

「二〇〇〇年六月まで、中村医師は病院の建築があつたりして忙しくてアフガン側の診療所にはしばらく行けない状態でした。六月になってようやく見に行かれたんですね。その時、いつもはなかなか渡れなかった川に、全く水がなくて、簡単に渡れたらしいのです。それにグラエ・ヌール周辺の様子が全く変わっていたらしいのですが、これは大変な旱魃だといろいろ対策を考えていたところにラシユトの雪崩が起きたんです。」

——中村医師はじめ、多くのスタッフが井戸掘りに集中していた時に、藤田さんはPMS病院で医療面を守っていたわけですね。中村医師不在のときに苦勞はなかつたですか？

「守るという意識はなくて、通常どおりの業務をやっていただけですけどね。今もほとんど、中村医師はアフガニスタンの方に行つてらっしゃるんですが、アフガン人でも、病院ばかりにいると、ペシャワール会がアフガニスタンで何をしているか、どのぐらいの規模で何をやっているか分から

ない。しかもパキスタンだと、もちろんアフガンに入れないので、ただ、話を聞くだけなんです。それで、例えばトルハムの井戸が完成して、地元政府機関への譲渡式があつた時など、中村医師が挨拶している写真などを病院のボードに貼つたりしていますし、井戸の月次報告や農業、水利事業の写真も病院の廊下のボードに貼り出すようにしています。そうすると、パキスタン人は本当に驚いているんですね。「えーっ、自分達のPMSはこんなことやっているの!？」って。先生はセレモニーがあまり好きではないので、「こんな写真は早くはずして」と言つて嫌がるんですけど、そういう写真があるとみんな元気がますよね。」

井戸掘りのレポートや井戸掘りの青年隊の話で知つたんですけど、場所によっては旱魃のためではなくて、もともと井戸がなくて、みんなが貯め水にたよっていたところがあるのです。蓮岡さんや目黒さんから、そんなところに井戸を掘つて、住民たちがすごく喜んだと言つた話を聞いたら、とにかく涙がでました。

——そうするうちに、二〇〇一年二月に、事務局から送信されるアフガン関係のニュースに、「ペシャワール近郊のジャロザイ・キャンプにアフガン難民が押し寄せている。ところが、パキスタン政府はそこを難民キャンプとして認定したくないため、国連の援助機関やNGOを入らせない。そのため、医療が不足している」という内容では毎日のようにニュースがありました。近くだからPMSから診療チームを送つてもいいんじゃないかと、中村医師、ジア副院長、事務長と私で視察に

行きました。しかし、中村医師もジア副院長も、ここはいい。今、困っているのはカーブルだと言われるのです。ここまで来れる人はまだいい、山越えもできず、カーブルに残っている人たちが本当はもっと医療を必要としているんだ、と。

それで、二〇〇一年三月に五チーム作って五つの診療所を開設しました。指示が出てから、二週間後には開いたんですよ。試行錯誤があつて最後は診療所の医師やナースを現地で雇つたのですが、薬品や医療器具の管理のためあつて各診療所に病院側のナースを一人ずつ送りました。最初は、ドクター五人、ナース十人、検査技師五人をPMSから送つたので、病院はガラガラになつてしまいました。中村医師も一緒に出発され、みんなで行つてらっしゃいと送り出しました。

それが二〇〇一年三月でした。カーブルの診療所は二〇〇一年九月十一日の事件後も、空爆のときもずっと続けられました。

不思議なのはトルハムの国境は閉まつていたのに、うちの診療所のチームは一ヶ月も休むことなく、スタッフも一ヶ月ごとに交代できたという、そのボーダー（国境）の曖昧さですね。」

それはどういうことですか？

「トルハムは国際的なボーダーなんです。そこでは今もアメリカ軍が活動していますが、パキスタン側では部族自治区なんです。それで、管理が及ばず入るところがあるんです。現地の人はいくつ知っていますから、国境の山道の難所を徒歩で越えて、ある地域に到着すると病院に電話があつて、そこから電話して車を出してもらおうという、

その繰り返しでした。」

——途切れることなく、それが二〇〇二年六月まで続いたんですね。

「本当は三月で閉める予定でしたけど、現地のスタッフからもう少し続けてくれ、まだ必要だという要請があつたのです。六月にはNGOが殺到して、それと同時に資金や家賃が高騰しました。当時すでにほかの団体がいっぱいきて、病院も増え、働き口もいっぱいできてきたので、もう必要ないだろうということになりました。」

——タリバン政権下のカーブルに入ったアフガン人のスタッフの反応はどうでしたか？

「中村医師の今までのやり方は、どこで始めるにしても、とにかく現地の了解をとるとというのが基本なんです。五つの診療所を開くときにも、必ずタリバンと話し合いをしたんです。すると『貧しい人たちのために診療するならば』と、本当に協力的だったので、スタッフたちも安心して診療してましたね。」

空爆が始まって、アメリカが北部同盟に援助して空爆を始めた頃に、北部同盟系のハザラ人が診療所の車を停めていやがらせをしたらしいんです。そのころはまだ北部同盟の制圧前だったので、タリバンが来て、PMSの活動を邪魔するんじゃないかと助けてくれたそうです。また、毎晩八時になるとなにか問題がないかとかかさず見回りに来てくれたそうで、安心して働いていました。」

——PMSのアフガン人医師は、パキスタンに逃げてきたいわば難民ですよ、彼らはタリバン政権以前にパキスタンに逃げていた人たちなんですか？

「最初診療所に送つた人たちはそうです。その後、カーブルでも雇つたんですが二人はタリバン側から来た人でした。医師がなかなか出勤してこなかった時にタリバン政府に苦情を言つたら、その翌日には医師が代えられた。それぐらい規律に関して厳しかったですね。タリバンにはいろんな見方があるんですけど、わたしたちにはすごく協力的でした。食糧配給のときにも、『あなたたちは貧しい人たちに本当に受け渡しているから』と言っていました。食糧配給のとき、人が殺到して混乱しないよう、いつも治安を守つてくれたし、配給がスムーズに行くように人を配置してみんなを一緒に並ばせたそうです。その写真をPMSのアフガン人スタッフが見て、『えっ、こんなことできるの？』とびっくりするぐらいでした。」

ジア副院長が気を利かせて、『配給を手伝ってくれるタリバンたちも、

すごく貧しいから、お札にこの小麦粉一袋をあげてはどうか』と私たちに提案があつたんです。中村医師は『それはいいことだ』とあ



年内に6キロの掘削が完了する用水路遠景



げたんです。むこうから要求されたのではなかったのです。「自分たちは治安を守っているから、何かくれ」とは一回も言わなかったそうです。あれは立派でしたね。」

——話は変わりますが、以前、藤田さんが話されたガラムチエシユマやコーヒスタンの巡回診療はどうなっていますか？

「コーヒスタンは治安が悪いため、去年の三月に閉めたままです。その県庁みたいところからは開いてくれと言ってきているんですが、そう言っている彼らが治安を守ってくれないので開くことができないと答えています。村ではすぐに銃を向けられるし、うちのナースは、それで怪我しているんですよ。診察代として五ルピーもらっているのだけど、その金をよこせと言って、ナースに銃を向けた村人がいて、それで銃先についている剣で怪我したのです。」

村の人たちって思い込みがあつて難しいですね。別に宣教活動をしたわけではないのに、昔宣教活動があつたからって反対するのです。実際は診療を始めたところキリスト教徒の医師やナースがいただけなんです。あそこは何かしてアプローチしないといけない場所なんだけど、なかなか難しいですね。住民のためになるってわかっているのに、活動できない。来ないでほしいと言っているのは、宗教家だったり、お金持ちだったり困っていない人たちのね。」

——話は変わりますが、藤田さんはペシャワールに行かれてから何年になりますか？

「一九九一年だったから、十二年ですかね」

——振り返っていかがですか？

「どうでしょう。一人の時期が長かったので、周りの人を巻き込めないで、何回も挫折したり、例えば、看護とかできるのだろうかと思っていたんですけど、最近日本人も多くなりましたしね。」

嬉しいのは、五年ぐらい前からやっていたトレーニングの効果が出てきたことです。例えばナーシング（看護）。トレーニングを受けていた人たちが今、ナーシングを回しているんですね。ところが、一つの不安は、ここ数年、私自身に時間がないので、彼らに任せっきりなんです。何か現地流になっているというか、ナーシングで最も大事なことのひとつである清潔操作をすとか、清潔に注射を打つとか、そういうものの向上ができないという、そこが欠点ですね。」

——後は指導次第ということですか？

「そうですね、形としてはできてきたんですけど、体温の記録をつけたりもできるようになったし。ただ、記録をとっているそばの病人が苦しそうにしている時、背中をさすったりというようなことはできないんです。看護の精神みたいなものをどうやって教えるかが、今後の課題になりますね」

——ハンセン病の患者さんに対しての差別がなくなかなくならないという話を聞きました。

「医者の中にもハンセン病の患者さんの診療を嫌がる人がいるし、薬を塗るのに患者さんに触れない人もいます。難しいです。」

ナーシングの中にお父さんがハンセン病というスタッフがいるんですね。それでその子たちはすごく敏感になっているから、他の人たちが嫌っている

のを見て、とても傷ついている。でも、そういう子たちのほうが一所懸命仕事するんですよ。」

——今まで続けられた原動力というか、藤田さんを突き動かしたものの何ですか？

「いやあ、日常的にはそんなこと、考えないでしょう。ほら、一ヶ所で仕事をしている、例えば、就職して、仕事をやっているという感じ。もう、日常になった感じですね。」

腹の立つことのほうが多いのだけど、一緒に仕事して、達成感というのではないけど、何か手ごたえがある。現地の人々の反応とか、ハンセン病の人のケアにしてもそう。あの人たちは決してありがたうなんて言わないのね。あれしてくれ、これしてくれと言う。だけど、手ごたえがある。だから現地の人々が動かしているのかも。」

——現地の人によって動かされている……。

「そう、……付き合いが長くなりましたしね。さつき話したナーシングの子たちだって、最初はあんなに何もわからなかった子たちが、今、中心になっているし。いっしょに仕事していると、なんているのか、連帯感みたいなものが出てくる、そういう感じがしますね。」

ナーシングの院内トレーニングを始めて五年になりますが、院内で看護のトレーニングをしたので彼らに正式な資格は与えられません。一所懸命学ぶので将来この子達がここを辞めるとき何も資格がないと気の毒だと感じていましたが、PMSでトレーニングを受けナーシングアシスタントとして働いていた事が証明されると次回の就職に大変役に立つと言う事が最近分かってきて安心しました。」

# 時空を超えてもどる旅人

甲斐大策著『聖愚者の物語』を読む

樋口伸子

本会報の表紙絵でなじみ深い甲斐大策氏の『聖愚者の物語』は、生と死、聖と俗を貫く緊張感が美しい掌篇小説集である。

戦後でもない我が家に粗末な作りの『アラビアン・ナイト物語』があった。児童向けとはいえ、中の物語と絵は怖くて残忍で、子ども心にも淫らで不思議な魅力に満ちていた。この世の国の話とは思えなかった。

それから何十年か経ち、甲斐大策という人の小説集『生命の風物語』と『シャリマール』を読んだ時の衝撃はそれ以上だった。この二冊は甲斐版へ熱風・千一夜物語と呼ぶにふさわしい幻想を帯び、人びとの営みは絵を見るように鮮明なのに、彼らの不幸には我らが薄っぺらな尺度では測れないものがあつた。

何より驚いたのは、そのような国が現実であり、著者には自国同然であるということだった。以来、わたしには甲斐氏が魔法のランプを隠しもつアラジンやシンドバッドであり、へ在日異邦人への眼をもつ人と映る。

甲斐大策の世界への入口はいくつもある。第一の扉は画家としての世界、次に旅人としての紀行文やアジアの文明論、第三には類まれな小説の世界。ほかにも扉があるだろうが、いずれにも、風に舞う大地の土埃と同じほどに人間の匂いが濃厚だ。

「〇〇一筋に」を尊ぶわが国では、このような多面的才能は正当な評価を受けにくい。一筋というなら、彼こそはシルクロードの各地を歴訪することすでに三十余年、イスラム教徒であるばかりか、パキスタンやアフガンの人びとへの思いは同胞と変わらぬほど熱い。

だからこそ、戦乱の渦中であれ、市場の雑踏であれ、または厳しい山岳の寒村であれ、流離う人びとに寄せる眼差しは同情とか哀れみなどの一方的な独善でなく、貧者に漂う気品と誇り高さ、義勇に潜む裏切りと報復の非情さなどを見据えて描けるのだろう。

「鳩寄せ」は、カーブルの貧しい地区の屋根の上で、ほろ布をつけたポプラの枝を振り回して鳩を

集める男たちの話。鳩寄せに実利的な目的はなく、爆撃で壊れた家の上でさえ愚かで清らかな魂の遊びはなされる。三代続くへ鳩バカもいて、厳しい現実生きる住民たちは彼らを軽蔑しつつ、心の奥では暇で無欲な幸福者と微笑まじりに眺めている。

簡潔な筆致は詩を詠ずる賢者を語って深遠。怯える女や子どもを描いて繊細。命を命であがなう正邪を示して剛毅。時空を超えて旅した人が現実を描くペンには魔法のインク壺でもあるのだろうか。いや、このアラジン氏は自らの手脚と目を魔法の絨毯となし、義に厚い契りで神に近い愚者を知る。一話ごとの細密なペン画も重要な語り手の役を果たす。

十五年ほど前、トルコの不思議な映画が縁でペシャワール会と甲斐氏のことを同時に知り、わたしは専らへ読む会員となった。当時は思いもしなかったが、中村先生の現地報告や著書を読むにつけ、お二人の彼我に向ける視線がクロス・オーバーしていたことにあらためて気づくのである。

(詩人・ペシャワール会会員)



まを物たしぜひ  
紙画のしぜ  
お紙のしぜ  
頂いて「表紙  
稿頂いて「表  
寄稿頂いて「  
ご寄稿頂いて  
本会報にご寄  
めぐる甲斐大  
語」として刊  
語」として刊  
(石風社刊・1800円+税)。  
ご購読下さい。

●事務局便り

\*二〇〇二年一月、ある全国紙に宗教界の重鎮の言葉が掲載されていた。それは次のように要約されて、決して忘れることが出来ない。

「アメリカの現実的な力によって、アフガニスタンの悲惨な状況は改善された。仏教は絶対平和主義を唱えるが、そういう理想主義で果たして地上の平和を維持・強化できるのか自問せざるを得ない」

これは宗教者に偏った言ではなく、「仏教は」という文言を除けば、日本の現実的良識派と称される知識層やジャーナリズムにさえ共有されている考えである。二〇〇一年十月七日、アフガニスタンに対してアメリカの現実的な力（報復爆撃）が行使された二年、アフガニスタンの「悲惨な状況」は改善されただろうか。二〇〇三年三月二十日以来のイラクに対する軍事力行使によってイラクに何がもたらされ何が改善されつつあるだろうか。

傲慢に聞こえるかも知れないが、先の言にはあまりにも表層的な理解による「アフガンの悲惨」と「アメリカの正義」への先入観が潜んでいると思える。今や米英が情報操作によってイラク侵攻を行ったことは明白になりつつある。しかしそのことは国際政治の常道で、それほど本質的なことと思えない。熟考すべきは、フセイン体制のように「悪逆非道な体制」であると国際社会が認識すれば、一方的に軍事

介入することも「正義」として許され、生じる民衆の犠牲はやむをえないこととして済まされるのかという問題である。アメリカ現政権のかざす「正義」や「自由」の背景にかなりグロテスクな「欲望」が潜んでいることも次第に露呈されつつある。

私たちは今こそ、絶対平和主義を捨てずに、いかにすれば地上の平和を維持・強化できるのか、と自問すべきなのではないか。

ペ村から

去る七月二十日、福岡市での「現地報告会」を聞きに行った。中村先生の講話は「耳にはめると耳をケガする聴診器と数本のピンセット」と二十年前の現地の状況を偲ばせて始まった。仲地医師、検査技師の坂尾さん、農業担当の橋本さんと、スライドを使っているの臨場感あふれる説明に、東京など遠方の方も含めほぼ三百人が心を寄せて聞き入った。ひたむきな話の中に、私の想像力は乏しくとも尋常でない苦勞が垣間見える。現在、会員約一万三千人といえ、日本の総人口から見ると、一万人に一人という掛け替えのない存在である。現地の方々の活動と会員の方々のご支援は車の両輪であろう。現地の、そして会員の皆さまの、何よりもご健康を心よりお祈りいたします。会の弛みない歩みと、平和を希求しながら…。(岡)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年の一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAHOUSE（千八一〇一〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇一三五 上村第二ビル三〇七号 TEL七三二一三三七二）内におく。

中村哲医師の本  
**辺境で診る  
辺境から見る**

【2刷】1800円

**ダラエ・ヌールへの道**

【3刷】2000円

**医者 井戸を掘る**

【8刷】1800円

**医は国境を越えて**

【4刷】2000円

**ペシャワールにて**

【8刷】1800円

アフガニスタン前線報告 仮題  
9.11後のeメールを収録 【予価】1800円

**聖愚者 大策甲斐の物語**



「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1800円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092(714)4838

**ほんとうのアフガニスタン**

1200円

光文社 東京都文京区音羽1-16-6 TEL 03(5395)8125

**アフガニスタンの診療所から**

1200円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03(5687)2670

価格はすべて本体価格(税別)です